

日本國語大辭典

第十八卷

編集 日本大辭典刊行会
発行 小学館

日本國語大辭典

第十八卷

編集 日本大辭典刊行会
発行 小学館

日本国語大辞典 第十八卷

昭和五十年十一月一日 第二版第一刷発行 ©
昭和五十五年七月一日 第二版第六刷発行

編集 日本大辞典刊行会

発行者 相 賀 徹 夫

印刷者 小 林 清

発行所 株式会社 小 学 館

東京都千代田区一ツ橋二一三ー一
〔郵便番号〕一〇一〔振替〕東京八一二〇〇

造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

編集顧問

金田一京助
佐伯梅友
新村出
時枝誠記
西尾実
久松潜一
諸橋轍次
山岸徳平

編集委員

市古貞次
金田一春彦
見坊豪紀
阪倉篤義
中村通夫
西尾光雄
林井栄大
松井栄一
馬淵和夫
三谷栄一
山田巖
吉田精一

(五十音順)

製	表紙	表紙	特選	印
本	色箔	クロス	本文	刷
			用紙	
図	独逸	ダイ	三	図
書	顔料	ニック	菱	書
印	工業	ク	製	印
刷	株式	株	紙	刷
株	会社	式	株	株
式		会	式	会
会		社	会	社
社			社	

後方、四方、六方、八方、諸方、多方、方位、方角、方針、方面②てだて。やりかた。方計、方策、方式、方術、方途、方便、方法、方略、方程式、処方、藥方、方案、方技、方劑、方士③四角、円④の対。方円、方解、石、正方形、直方体、長方形、平方、立方、前方、後方、方眼、方形、方壺、方陣、方錐、方寸、方丈、方板、方墳、方領、方鉛錐④正しい。規則のある。方正、方雅、方嚴、方等、方外、方内⑤くに。土地。中心から離れた国々、地方、方土、方輿、異方、遠方、方音、方言、方俗、方伯、方物⑥いくつかのうちのひとつ。一方、先方、他方、当方、双方⑦ちょうどあたる。一方、今①補注歴史的仮名づかいについては「ほう」方を参照。むほう方

〔訪〕ハウ①ならう。まねる。「倣」に同じ。／訪効／仿製／仿宋②あてもなく歩く。さまよう。「彷彿」に同じ。／仿徨／仿伴

〔彷彿〕ハウ①あてもなく歩く。さまよう。「仿」に同じ。／彷彿、彷徨②よく似ている。そっくり。／彷彿／ハウ①かんばしい。かおりがよい。／芳郁、芳艷、芳醇、芳潤、芳菲、芳馥、芳芬、群芳、衆芳、秋芳、摘芳、芳香、芳氣、芳陰、芳園、芳卉、芳樹、芳草、芳叢、芳花、芳酒、芳樽、芳茗、芳醴、芳景、芳春、芳辰、芳節、芳紀、芳魂③評判がよい。名声が高い。／はまれ。／芳烈、遺芳、流芳、芳声、芳躅③相手のことに関する美称。／芳恩、芳志、芳心、芳信、芳情、芳翰、芳書、芳牘、芳名、芳命④ほう芳

〔枋〕ハウ①「蘇枋」は、木の名。②いかに。ふね。枋に同じ。

〔舫〕ハウ②二隻ならべてつないだ舟。もやいぶね。いかに。船舫、花舫、画舫、彩舫、文舫、巨舫、輕舫、連舫①

〔訪〕ハウ①おとずれる。たずねる。／訪問、訪議、往訪、來訪、歴訪、訪英、訪日／訪客②さがしもとめる。／搜訪、探訪、訪求、訪古、採訪

〔髣〕ハウ①「髣髴」は、よく似たさま。ほのかに見えるさま。

〔魴〕ハウ①淡水魚の一種。おしきうお。／魴魚②「魴鰯」は、大魚。③「魴鯉（ほうぼう）」は、わが国で、沿岸魚の一つ。

〔傍〕ハウ①わき。かたわら。傍輩／「↓ボウ」②

〔傍〕ハウ①舟をこぐ。／傍人②むち打つ。／傍掠／〔傍〕ハウ①ふた。たてふた。／勝示（ほうじ）とも

〔↓ボウ〕①

〔謗〕ハウ 悪口をいう。そしる。そしり。／謗法／誹謗、謗難／「↓ボウ」①

4 包包の類

〔包〕ハウ①包包 つつむ。つつみ。／包囲、包裹、包懷、包括、包含、包摂、包被、包有、包容、包裝、包絡、梱包、内包、空包、実包、裹包包帯、包裹、包袋、包葉、包皮、包葉②ほう（包・包）

【抱】抱①かかえる。だく。「抱擁、抱持、介抱
孩抱、襁抱、合抱、抱閤、抱玉、抱柱、抱腹、抱朴、抱
卵、抱塞、抱寒、抱薪救火」②心にいだく。おもう。
「抱懷、抱負、辛抱、抱つ」

【抱胎】ハウ①胎児を抱つゝむ膜。えな。胞衣、胞果

②母の胎内。同胞③生物体を組織する微細な原
形質。細胞、芽胞、孢子　ムほう(抱)

【砲】砲①おこつ。たいほう。「銃砲、砲撃、火
砲、巨砲、空砲、大砲、鉄砲、機關砲、高射砲、砲煙、砲
火、砲艦、砲丸、砲金、砲口、砲座、砲車、砲手、砲術、
砲身、砲石、砲台、砲塔、砲彈、砲兵、砲門、砲臺、砲
列　ムほう(砲)

【飽】飽①食物が十分である。食べあきる。「機
飽、温飽、厭飽、飽食、飽満、飽和」

【咆】ハウ①獸がほえる。「咆哮、咆吼、咆勃」

【庖】ハウ①だいどころ。くりや。「庖厨」②料理。ま
た、料理人。「庖宰、庖子、庖人、庖丁」

【泡】ハウ①水のあわ。うたかた。「泡影、泡幻、泡沫、泡
沸気泡、水泡、流泡」

【苞】ハウ①わらぶと。つつみ。「花苞、苞苴、苞羅」　ム
ほう(苞)

【炮】ハウ①やく。あぶる。「炮煮、炮煎、炮烙(ほうら
く、ほうろく)」

【袍】ハウ①皮膚病の名。天然痘。「袍瘡、袍疹」

【抱】ハウ①ふきでもの。にぎこ。「面抱」

【抱】ハウ①わたいれ。ぬのこ。「溫袍」②束帯の上
着。袴笏位袍、帷袍　ムほう(抱)

【抱】ハウ①ふくべ。ひさご。ひょうたん。苦瓠、繫匏、
青瓠、匏瓜、樽匏、匏土　ムほう(匏)

【鮑】ハウ①塩つけの魚。しおびき。「鮑魚、鮑肆」②
「管鮑」は、管仲と鮑叔牙のこと。

【鮑】ハウ①こなもち。だんご。「麪鮑(めんぼう)」

5 放の類

【放】ハウ①追いやる。しりぞける。はなす。「放伐、追
放、放却、放逐、放黜、放校」②送り出す。はなつ。「放
散、放出、放射、放送、放水、放牧、放電、放尿、
放列」③自由にする。ゆるす。にがす。「解放、開放、
釈放、放任、放免、放牧、放養、放生、放鳥、放鷹、放
流、放課後、放心、放神、放念」④なげける。すておく。
もともち。「放棄、放擲、放置、放物線」⑤かつて。お
もうたま。ほしい。「豪放、粗放、奔放、放逸、放
曠、放恣、放肆、放縱、放達、放蕩、放蕩、放慢、放浪」
放盜、放歌、放吟、放言、放笑、放情、放胆、放埒」

【傲】ハウ まねる。ならう。「模倣、倣模、倣效」

6 奉の類

【奉】①たてまつる。ささげる。「奉加、奉獻、奉呈、
奉奠、奉納、奉幣」②つかえる。つとめる。「奉仕、奉
養奉職、奉公、奉上」③つつしんでする。「奉祝、奉
誦、奉還、奉迎、奉贊、奉伺、奉祀、奉謝、奉送、奉答、
奉唱、奉対」④大事にささげもつ。「奉体、奉戴、信

奉、遵奉、順奉、奉朝、奉旨、奉書、奉勅（「トブ」）
 【俵】① 勤めに對して与えられるもの。給料。俵給
 俵秩、俵祿、加俵、増俵、減俵、月俵、年俵、本俵、罰
 俵、月俵（俵錢、俵米）　　もほう（俵）
 【捧】① ささげる。さしあげる（捧持、捧呈、捧読、
 捧日）② いただく。かかえる（捧心、捧腹）
 7 朋（朋）の類
 【朋】① 同門の友。なにか。師朋、儕朋、友朋、朋徒、朋
 党、朋比、朋輩、朋友、旧朋、同朋
 【崩】① くずれる。くずれおちる。こわれる。崩
 壊、崩潰、崩解、崩崖、崩落、土崩、雪崩は、なだれ
 ② 天子の死についでいう。崩御、崩殂
 【纏】ハウ① まきつつむ　　纏帶
 【棚】ハウ① 板を水平にわたしたたもの。たな。かへは
 し。棚窗、陸棚りくほう、りくだなし
 【礪】ハウ① 石の打ち合う音。音の形容。礪碎、礪碎
 ② 化学元素の名。ボロン。B。硼素、硼酸、硼砂、硼
 化物
 【鵲】① 想像上の鳥。おとり。鵲鵲、鵲鵲、鵲拳、大
 鵲、鵲雲、鵲雛、鵲程、鵲図、鵲翼　　もほう（鵲）
 8 法の類
 【法】ハフ① ホフ　　① おきて。きまり。さだめ。法規、法
 制、法則、法度（ほうど、はつと）、法律、法令、法治、
 法定、非法、不法、無法、惡法、旧法、公法、私法、明
 法、憲法、刑法、民法、商法、國法、六法、独法、英美
 法、成文法、設置法、訴訟法（違法、合法、順法、違法、
 適法、司法、立法）、法科、法学、法理、法術、法政、法
 禁、法權、法源、法例、法務、法家、法官、法曹、法外、
 法人、法典、法文、法案、法網、法廷、法服、② やりか
 した。した手。手順。方法、法式、技法、作法、手法、製
 法、便法、用法、療法、劍法、陣法、戰法、兵法、筆法、
 論法、航法、走法、礼法、算法、加法、除法、乘法、最小
 自乘法、運転法、救急法、表現法、③ 手本。基準。法
 書、法帖、法線（④ 宗教上の教え。仏教。法悅、法華、
 法藏、法問、教法、仏法、妙法、正法、像法、末法、説法、
 法、護法、法然、法雨、法界、法海、法味、法門、法力
 法文、法藏、法輪、法語、法談、法話、法号、法名、法
 身、法眼、法王、法皇、法師、法嗣、法統、法脈、法体、
 法器、法城、法会、法筵、法事、法要、法難、法藏、法
 物、法衣、法鼓、法燈、法螺、⑤ 仏教で、存在するもの。
 の。諸法、万法、色法、心法、有為法、無為法（法爾
 法執（はつしゅう）、法性（はつしやう）、法数（はつ
 ずう）、法相（はつそう）⑥ 文法学の範疇の一つ）
 （仮定法、直説法、命令法、希求法（⑦ フランスの）
 音訳の略。法國、法貨）　　補註 歴史的仮名づかいに
 ついては「ほう（法）」を参照。　　もほう（法）
 【珎】ハフ「珎」は、金属器の表面に焼つけたうわ
 ぐすり。
 9 保の類（この類の歴史的仮名づかいは、従来「ハ
 ウ」とされてきたが、「ホウ」が正しい）

ほうの下(もと)の平等(びやうどう) すべての人
が、法の上で平等の取り扱いを受けるべきである
とする原則。基本的人権の一つとされる。アメリ
カの独立宣言、フランスの人権宣言などで確立
されたもので、わが国の憲法も人種・信条・社会的身
分・門地などによる不等差別を禁止している。
ほうもあれ (上にくる事柄をうけて) そのよう

な目にお会うともかまわない。浄瑠璃・重井筒上「二人の親に冥途からにらみ殺さるるほうもある」歌舞伎・阿国御前化粧鏡二幕「明日が日縛られる法（ハツ）もある」

ほうまかく 方法を考える。計画をたてる。手段

をめぐらす。滑稽本・一盞綺言「ナソレえびやかあふぎやかで法(ホフ)をかきやす」・歌舞伎黒手組曲輪達引「序幕「悪く法(ハフ)をかきなさると首へ縄が掛りやすせ」

ほうを露のぞひさぐ 賄賂を受け取り、法を曲げる
 ほうへハウ「苞」名 花序に出る葉。芽や蕾（つぼみ）
 をおおうて花を保護する。残続性のあるものでは普通
 通花や花柄の基部に残っている。包葉・*植字啓原
 二苞苞はかまき亦萼之別種也、故花有苞者無萼
 【発音】ホー 翁のう余のよムのむほう【字音語素】

「保」ホウ 郷里」〔古詩書伊京・天正・黒本・易林・書言〕 凸は

ほう【封】「名」「ふ(封)」に同じ。史記「酈生伝、戦勝
而不^レ得^レ其賞、拔^レ城而不^レ得^レ其封」^{〔漢書文選〕} 釜箇ホー^{〔金鑑〕}
困^{〔漢書文選〕} ほう^{〔字音語素〕}
ほう【胞】①えな。胞衣。漢書「外戚伝下、孝

成趙皇后宮曰、善藏我兒胞、
 実などの室の称。房室。発音ホー （音） 困
 〔字音語表〕
 ほう〔俸〕〔名〕職務に対して官から受ける手当。扶持
 ほう〔名〕

米(ふちまい)。俵給。*經濟録一、食貨、粟米若は金銀錢を賜はりて、其衣食に給するを俵といふ。今の俗に切米、給分といふ是也。俵に歳俵、月俵の品あはれり。*隨筆・孔雀樓筆記、「世人扶持方米、これを俵に(ホウ)といふ。あやまり、吾国の扶持方は、多少によらずみな歳祿なるぞ。」*当世書生氣質・坪内逍遙「四年比(としころ)俵(ホウ)あまた賜はりつつ、過分の榮華に耽る程に」*後漢書・光武紀「詔增三百官俵」

〔発音〕ホー・(簿)の困 〔古語〕色葉　　むほう〔字音語素〕

はう【砲】（名） おおづつ。大砲。火砲。*西国立志
編「中村正直訳」七・四「十八門の砲、九十五人を具た
る船を借し与へ」（発音） ホー（響）（困）（奈）（困） っほ
う【字音語素】

ほう・ハウ「袍」〔名〕①公家の装束の表衣(うえのきぬ)。束帯や衣冠に用いる位階相当の色による位袍と、位色によらない雑袍とがあり、束帯の位袍には、文官の有欄縫腋(ほうえき)と武官の有欄闕腋(けつえき)とがある。

と二種がある。盤頭(まるえり)で、身幅二幅、袖幅二幅半を例とする。地質は、冬は綾、夏は段織(こめおり)。五位以上は家流による有紋、地下は無紋。文官の縫腋はよつ、しのきぬといい、武官の闕腋はわきあけのころもという。なお、武官の隨身の当色(とうしき)とする蜜絵ばんえの袍や褐衣(かちえ)の類がある。うえのきぬ。＊統日本紀和銅元年九月庚辰「賜予行所」経国司目以上袍袴各一領。造行宮・郡司祿・各有差。＊運歩色葉「袍ハウ」②転じて、上衣。＊読本椿説弓張月「一回」発つ矢を、一条は袍(ハウ)の袖に」(発音表)――(舊)困(余)困(国語書言、ハウハウ字音語表)は「ハウ」袍(名)①八音の「つ」瓢(ひさこ)を主要節用集「袍ハウ 楽器」＊爾雅翼「枳草八葉」袍在ニハ音之一、古者笙十三簧、竽三十六簧、皆列管匏内、施簧管端」②笙の部分名称の一つ。十数本の竹管をさし込む壺状の部分。「つば」「かしら」ともいう。

ほう)【烽】《名》律令制で諸國に設けられた緊急通信施設。またその合図の煙・夜間は大、はばは二キロごとに設け、烽長、烽子を配した。実際には大宰府から京に外敵を通報する施設が作られ、平安時代になって大宰府管内を除き廃されたが、その後寛平六年(八九四)出雲國・隠岐國に作られた。烽火(ほうすい)。とぶひ。・正倉院文書・天平六年三月三

日・出雲計会帳(寧楽遺文)「同日移老紙 応置烽火状
 ・墨子・号令「昼則拳・烽火 夜則拳・火」
 〔発音〕ホー(標子)
 困 むほう〔字音語素〕

【報】①むくい。応報。・落窪一四「又かく死
 ばう」

ぬれば、我身の大納言になるまじきはうにてこそ有
けれど」*百座法談「三月二四日、長く三惡道ををはな
れて九十一劫がほど、天輪聖王の報をうけて」*今
昔三〇・五「何なる前の世の報にて此かか」るらむ
②「返れしこと」*太平記二・八「慧源禪巷南方合休
事」我聞漢我頸を以て千金の報（ホウ）万戸の邑に購
つぐのふと」*史記「孝文紀」先王遠施「不求其
報」③しらせ。通知。父死去の報に接す「礼記
郊特牲」王皮弁以聽祭報」④「ほうじん（報身）

の略。＊風姿花伝「四」今の代の式三番是也。則、法親
 応の三身の如來を象り奉る所也」〔笈箇ホー 櫛之回
 困 余之困 古語畫色葉・文明 ムほう「字音語素」
 ほう「鈔」〔名〕中国漢代の酒壺。同時代の「鍾」が

円形の器体であるのに対し、胴腹がふくらむ方形となす。方台があり、獣環をもつ。青銅器のほか灰土陶のものもある。

【甗】（名） 中国古代青銅器の一つ。盛酒の器と考

えられている。形はたけの低い九壺で、口がしまり台がある。方形をなすものもある。殷代に出現し、文様は初期には饕餮文(とうてつもん)がみられ、春秋戦国時代になると蟠螭文(ばんちもん)素文などが用いられる。曼曼(まんまん)はいほう。

【豊(名)】易の六十四卦の一つ。三三 上卦は震(雷)、下卦は離(火)。震は動を、離は明を表わし、内

が明らかで外に向かって動くさま。盛大になる象。
雷火豊。*いさなり(幸田露伴「四四」煉と豊ホウ)
とが何とやら」 ムほう(「字音語彙」)
ほうハウ「箔」「名」「ほう(箔)の物」に同じ。・虎明本狂
言「餅酒」さかづきは空とつちとのあひの物ふじをづ

きすのはうにこそめ」
ほうの物(もの) 下土器(したかわらけ)の一種。
金箔などでだみ絵を書き、彩りをほどこしたものの
ほう。〔貞丈雜記一七〕

ほう【蓬】名 ヨモギのこと。＊花柳春詠 織田純一郎
歌六三 雲鬢乱れて蓬(ハウ)の如し 　　むほ〔字音
語素〕

ほう【鳳】名 古代中国で、めでたいものとされた想像上の瑞鳥子いちょう。また、その雄。羽に五色の文があり、聖人や徳の高い天子が出れば、それに応

じて出現すると言われ、わが国でも瑞鳥の一つとして信じられた。転じて、聖人・天子のこと。また、天子に関する事物を形容するのに用いられる。↓鳳凰（ほうおう）。『文華秀麗集中』奉和春閨怨管原清式一・二・治部省・祥瑞・略。鳳。八狀如鶴。五綵以爲冠。鸞。蛇頭龍形。』・『太平記一七・金崎船遊事

「蕭韶（しょうでう）九奏すれば鳳（ほう）舞ひ魚跳る感也」●論語「微子」楚狂接輿歌而過孔子曰、鳳兮鳳兮、何徳之衰、往者不可諫、來者猶可追」〔桑名春一（儒）の困〕〔吉澤義文明・書言〕ひほう〔字音語素〕

ほうの 薔(いらか) 薔の美称。・東関紀行 鎌倉遊
覧「鳳の薔、日にかがやき」・源平盛衰記二・四・南
都合戦同焼失、東大寺と申すは、一閭浮提無二無三
の梵園、鳳薔(ホウノイロカ)高く聳えて」
ほう【褒】「名」 はめること。善をすすめる美をはめたた
えること。・文明論之概略 富沢諭吉 四・七「善を為
せば心に嫌きの褒ありて」 ムはう(「字音語素」)
ほう【鋒】「名」 刃物の先の、とがった部分。ほこさき。
きつさき。また、刀。つるぎ。刀剣。武器。・日本開

化小史・田口卯吉二・四「其鋒を南し金を滅し宗を滅
 し」・後漢書・遠紹伝「臣所三將校・登鋒履刀死者過
 半」
 【発音】ホー ー 無之困 ムほう【字音語素】
 ほう【鵬】【名】（「ほう」とも。・莊子・逍遙遊による語）

想像上の大鳥の名。鯉（こん）という大魚が化したものとされ、翼の長さは三千里あり、一度に九万里も飛ぶという。おおとり。★三教指帰下「夫拳 鱗濫觴、曾無由見三千里之鯉、翥翥翻籬籬、何能知有九万之

鵬こ・かくれんば(金麿縁雨)「死者の首を斬るよりも易し」と鯢(こん、鵬(ボウ)となる大願発起)・莊子・逍遙遊・北冥有魚、其名為鯢、鯢之大不知其幾千里也、化而為鳥、其名為鵬、鵬之背、不知其幾千里也、〔発音ホー 翁之困 余之困 詳説書言 〆はう(字音語彙)〕

*虎寛本狂言・惠太郎「念仏百万遍申さば決定往生疑ひ有るまじ」との御示現で有た「ホウ」*二人女房
△尾崎紅葉中・六「お冷つめたい。ほう冷い」
○用言①田畑で風を呼ぶ時の声。鹿児島県肝属郡高山
979 ②鳥や鶏などを追い払う時の声。岩手県金石130

山口県774 福岡県博多906 彦岐 934 鹿児島県肝属郡979
喜界島991 (ほうっ) 静岡県志太郡561
ぼう《名》方言①牛の子。子牛。長野県上水内郡戸隠
016 ②牛。神奈川県津久井郡286 新潟県三島郡419 佐渡

403 岡山県吉田郡731 香川県818
 ぼう『名』防置しらみ(虱)。愛媛県周桑郡831(ほう)伊
 豆八丈島大賀郷313
 ぼう『名』防置腸チフス。岩手県東磐井郡137 ②疫。
 疫病。盛岡113
 ほう『字音語素』1亡、亡、亡、妄、忘、望、邛、芒、鋸、俟、

茫惘 2 方坊防房防旁傍榜榜勝誘紡 3 毛眊旄髦 4 卯卯昂貿 5 矛茅袤 6 牟牟眸 7 虺虺 8 某某謀 9 冒(冒)冒帽媚 10 莠夢薨 11 その他
 羸呆牡割棒貌暴膨
 亡亡の類

【亡】^①なくなくなる。うしなう。ほろびる。興亡、

存亡^①欠亡、衰亡、滅亡、亡失^②亡國^③逃げる。／逃
亡、亡佚、亡匿^④亡婦、亡走^⑤敗亡、流亡^⑥亡命^⑦亡卒、
亡羊^⑧③死ぬ。死亡^⑨亡君、亡兄、亡父、亡夫、亡友、
亡魂、亡靈^⑩〔↓フ[㊦]モウ[㊧]〕

【忙】バウ せわしい。いそがしい。ひまがない。繁忙、匆忙、慌忙、忙劇、忙殺、忙然、多忙、春忙、忙事。
【妄】マウ でたらめ。すじが通らない。みだり。「もう」とも。妄誕、妄議、妄準、妄言、妄語、妄想、妄斷、妄動、妄評、妄賞。（→モウ）
【忘】マウ 記憶がなくなる。思ひ出せない。わすれる。遺忘、忘却、忘失、健忘症、備忘録、忘恩、忘我、忘形、忘言、忘年会、忘憂。（→モウ）
【望】バウ ①遠くを見た。／仰望、眺望、望見、

望、遠望、企望、展望、雲望、望遠、望氣、望郷、望樓、
②願う。のぞむ。のぞみ。「願望」「がんもう」とも、
欲望、渴望、希望、志望、羨望、待望、非望、大望、「た
いもう」とも、野望、切望、熱望、有望、絶望、失望、

望蜀^③望外^③はまれ。名聲。人望、衆望、聲望、德望、名望、輿望、望族^④満月の夜。もち。既望、望月「もちつき」とも「↓モウ^⑤」むぼう(望)

西相望云「望也」・和英語林集成初版「ツキワ
(ボウ)ニミツル」・易经「中孚、六四、月幾望」②
陰曆の一日目の異称。③漢方診法の一つ。肉眼
で患者を観察すること。視診。都鄙問答「四医の
志を問、先病人に望、容体を見るを望と云」
― 繪之因 〔國語下学〕 ぽほう〔字音語素〕
ぽう【眸】(名)ひとみ。まなこ。目。花柳春話「織田
純一郎即「三、眸、ボウ」を定めて之を見れば即ち人
なり」〔開函ボイ〕 〔繪之因〕 ぽほう〔字音語素〕
ぽう【帽】(名)頭にかぶるもの。かぶりもの。帽子。
・參天台五台山記「老宿道士著白練衫、付黒装、
袖口付黒絹広二寸許、不用、帶頭用、帽背長垂」
・大慈恩寺三藏法師伝永久四年点「五、去、帽(ホウ)而
叱之」・魏略「夫余国以金銀、飾、帽」〔開函ボイ〕
繪之因 余之因 ぽほう〔字音語素〕
ぽう【棒】(名)①細長く、手に持って振りまわすこ
とができるくらいの木、竹、金属製などのもの。百
座法談「三月一日、今一人は鉄のはなをもつて、閻摩
王の門前にいて、観智院本名義抄「棒、バウ」・文
明本節用集「棒、バウ、杖也、又梧、バウ」・魏書「爾朱
榮伝「人馬過戰、刀不如、棒」②「桎(かし)などの堅
い木を六尺(約一・八)ぐらゐの長さに細長く削つ
て武器としたもの。また、それを使う武術。棒術。
・太平記「一七、金崎城攻事、桎の棒(バウ)の八角に削
たがるが、長さ一丈二三尺も有らん、と覺へたるを打振
て」・虎寛本狂言「縛、此間きやつが棒を稽古致し
ます」③近世、自身番につめる者が持った長さ三
三尺約九〇センチぐらゐの木。三尺棒。また、明
治の初めころの巡査が持った三尺ほどの警棒。・雑
俳柳多留初「棒の中めんばくもなく酔は醒」・滑稽
本浮世床「二下、あんまり人立ひとたち、がするゆ
ゑ辻番から棒(ボウ)を持って来たを幸ひ」④本来折
れたり曲がったりするものが、かたくつばってし
まうこと。特に足についてい、疲れたりして足の
関節の自由がきかなくなってしまうこと。また、そ
の足。・雑俳「川傍柳四」下戸の礼棒であるひて帰る
也」⑤真直ぐに引いて描いた線。・道草夏目漱
石三六「本月二十三日丈に棒(ボウ)が引懸て消
してある上に」⑥折れたり、まがったりせず、真直
ぐであること。単調で変化のないこと。紆余曲折(う
よきよせつ)のないこと。⑦「めんぼう(麵棒)
の略。・雑俳「柳多留七四」棒でうつ物とは見えぬ番
麦の花」⑧制服の巡査をいう、盗人仲間の隠語。
〔隠語輯覧〕⑨パイプをいう、盗人仲間の隠語。
〔隠語全集〕〔編述〕従来、歴史的仮名づかいは「ボウ」
とされているが、鎌倉・室町時代の資料によつて「バ
ウ」であるとする説もある。〔国語〕天秤棒によつて「バ
ンぼう」。愛知県知多郡57、京都府竹野郡042、広島県
芦品郡752②すりこ木。新潟県三島郡脇野419③豆な
どの実を打ち落とすもの。からざお。鹿児島県肝属

郡佐多⁰⁴⁴ 團圓ホコの転(野草雜記 柳田国男)。 発音
ボ一⁰⁴⁵ 巴(鳥取・島根) 儼⁰⁴⁶ 〇 舍⁰⁴⁷ 〇
色葉名義下字・文明 伊京・明比・天正・鐘頭・黒本・易林・書言
まほう「字音語素」

まほうが折れる 決着がつかないで途中で終わる。
・雑俳・一夜泊「仁王だち棒や折れなん閑と閑」
・随筆・みをつくし「行違ひになぶり事いへば、其返答の利発さは、禅宗の小僧と棒の折る対物なり」
まほうが利きよく 防ぐことができる。効力がある
・歌舞伎・五大力恋藏「幕返し」アイ貴方様より外に「この棒はききませぬワイなア」
まほう食らわす 棒で打つ。・俳諧 梅翁宗因句集・秋「やがて見よ棒くらはせむ番委の花」
まほうに遭(あ)う 棒で打たれる。・浄瑠璃・鐘の権三重帷子上「わしは戊で長六十、うろたへ歩いて棒にあはぬ先に、長吠へせずとあにましよ」
まほうになる ①今までの努力や苦心がすっかりなくなる。棒に振る。・歌舞伎・小袖曾我薊色鍵「十六夜清心・五立返し」大夫女、俺が受合。どこへ出てしても非諸師。棒になる氣遣いはねえ」 ②柔らかいものや、曲がっているものなどがたたくつづいても、一度解けたら、凍って棒になって了ひますから」 ③ 〇あし(足)が棒になる

まほうに引く 棒引きにする。金銭の貸借関係をななしにする。・歌舞伎・三千世界商往來・口幕「揚詰め棒を棒に引き」

まほうに振る それまでの努力や苦心の結果をすっかり無にしてしまう。無駄にする。駄目にする。ふいにする。・仮名草子・浮世物語「一六、金銀無ければ、略終に家を棒にふりて」・浄瑠璃・双生隅田川「一〇、このれは命を棒にふりたいな」・青春「小栗風葉子秋・六二、生棒(ボウ)に振ってうただだあかね」 團圓棒手振にして売払う意からという「上方語源辞典」前田勇。

まほうの下(した)に回る犬(いぬ)は打てぬ 打とうとしてゐる棒の下で、尾を振っている犬はさすがに打つことができない。すがってくるものには残虐な仕打ちはできないことのとえ。杖の下に回る犬は打てぬ。

まほうの手(て) 棒を武器として戦う術。棒術。・日葡辞書「Bato te(バウノテ)」「随筆・嬉遊笑覧四四上「万歳諸用日記」略棒の手旧法八角に作り八八尺にいたし筋金入鉄の疣子を末四尺の間に打ぼうほど願つて針(はり)ほど叶(かな)う 願望ののきなかなかなえられないことをたとえている。・歌舞伎・勧善懲悪孝子誉一五幕「棒程願つて針程も」・叶ふ時節を親父様」

まほうをいまだく 主人や役人など、自分より高い立場にあるものから棒で打たれる。・浄瑠璃・嵐山立

姥、「棒いだいてもどうより」
 ぼうを 入れる (肩を天秤棒でんびんぼう)の下
 に入れて物を荷う意から) 手助けする。加勢する
 肩に入れる。・歌舞伎・芽出柳緑翠松前三幕「あ
 づらの、仕事へ一肩(ひとかた)棒を入れ」
 ぼうを 折る (「棒」はつゝかた棒) 手を引く。中
 途で投げ出す。棒が折れる。・雑俳・眉斧日録「四
 たり禿の棒を折る年」
 ぼうを 背負(し)よう 棒で打たれる。罰として棒
 に棒を背負(し)はされる。
 ぼうを立てる 物を企てることをいう、盗人仲
 間の隠語。(特殊語百科辞典)
 ぼうを 張る つつけんどんにいう。威張る。・滑稽
 本・人情穴探意の裡外「旦那の名代に來たと思
 うて、えらさうにボンボンとぼうはりくさつて」
 ぼうを 引く 真直ぐ線を引く。書いてある字の上
 に線を引いて消す。帳消しにする。棒引きにする
 ・雑俳・柳多留「七、こういたしますとかけ取ぼうを
 引」・春泥・久保田万太郎・むほん・三「もしうんと
 いつてくれば、いままで御用立したものは綺麗
 にここで棒を引く」
 ぼうを 振る 棒術を使う。・虎明本狂言・鍋八撥
 「勝負にはぼうをふりませうが」・日葡辞書 Boia
 fura(バウフル)「
 ぼう・バウ(勝)」ふだ。立てふだ。掛けふだ。また、
 門鑑。令義解・宮衛・儀仗軍器条「凡儀仗軍器略十
 事以上略出入諸門者皆責勝」・門司奏聞、勘聴
 出入こ・正法眼藏・安居・堂司あらかじめ四月一日よ
 り、戒服の勝(バウ)を理会す」 ぼう(字音語彙)
 ぼう・バウ(貌)「名」かたち。すがた。みめ。容貌。顔
 色。また外貌。・史記・仲尼弟子伝「吾以言取人
 失之幸予、以貌取人、失之子羽」 閑直ホー
 (音之語) ぼう(字音語彙)
 ぼう(暴)(名)(形動) ①あらあらしいこと。荒く、激
 しいこと。また、そのさま。・潛象新書上「上」星体
 の天上を行は、略々暴ならず遽ならずして」・詩経
 邶風・終風「終風且暴、顧我則笑」 ②道理にそむい
 ていること。不法であること。乱暴であること。また、
 そのさま。・文明本節用集「主暴不諫非忠臣(シユ
 ボウナルタイシメザルハウチウシニアラズ)」[新序]
 ・歌舞伎・善惡面兒手柏姫姫のお目「一幕」こなた
 衆は暴(バウ)な事を言はつしやるが、・文明論の概
 略(福沢諭吉)四・七「理を以て暴を制するの勢に至れ
 ば」・論語・堯曰「不・戒・成、謂之暴」 閑直ホー
 (音之語) ぼう(音之語) ぼう(字音語彙)
 ぼうを 以(もつ)て 義に易(か)く (史記伯夷伝)
 の「伯夷叔齊耻之、義不食周粟、隠於首陽山、
 采薇而食之、及饑且死、作歌、其辭曰、登彼西山兮、
 采其薇矣、以暴易暴兮、不知其非矣、

による) ①一つの暴を取りのぞくために、他の暴

ぼう【謀】〔名〕①はかりごと。計略。策謀。*浮世草

子、傾城禁短氣、三二、白人と化して客の為に謀ボウを説く。易経、繫辭下、徳薄而位尊、知小而謀大、力小而任重、鮮不及矣。*律二、唐惡逆、謀、謂、計謀。*律逸文・名例、稱日冬、称衆者、三人以上、称謀者、二人以上。*唐律名例、称衆、称衆者三人以上、称謀者、二人以上。むほう〔字音語素〕

ほう・バウ【**晁**】二十八宿の一つ。西方に位するもの。
寒鐘暮雨天」〔発直〕 晁之困

ぼう ほう【追】他ハ四 追う。追いかける。＊浄瑠璃
 『日短星吊』〔発音ボ―〕〔標マ困〕〔吉辞書易林〕
 ＊易林本節用集二十八宿略・吊（ハウ）。＊書経・堯典
 牡牛座のブレーデス星団付近をいう。吊宿すはる

夏祭浪花鑑「コリヤ往ねと言へ往ねと云へ往ね」
 ずば早う往け往け」
 盛岡¹³ 岩手県¹³ 宮城県¹⁵ 秋田県¹⁵ 山形県¹⁷ 越
 後⁴¹ 新潟県⁴¹ 富山県⁴³ 石川県⁴⁴ 福井県⁴⁴ 大野県⁴⁶
 山梨県⁴⁹ 巨摩県⁵¹ 長野県⁵¹ 東筑摩県⁵² 岐阜県⁵³ 静岡
 県⁵⁴ 小笠原⁵⁶ 愛知県⁵⁷ 三重県⁵⁷ 員弁郡⁶⁰ 滋賀県⁶¹ 彦根⁶¹
 京都府⁶² 与謝⁶² 兵庫県⁶⁵ 鳥取県⁷⁰ 島根県⁶⁶ 義経郡⁶⁷
 瀬⁷⁵ 広島県⁷⁵ 高知県⁷⁵ 佐郡⁷⁵ 地蔵寺⁸⁴⁴
 ぽう 八ッ【茫】形動タリ ①ひろびろとしているさま

まはてしないさま。(2) ほんやりとしているさま。とりとめもないさま。*西国立志編「中村正直訳」一〇・一六「字画跳躍するが如く、その意味茫として知べからざりけり」*野の花(田山花袋)六「白い茫とし

た霧の中には」
 ぼう(「感動」) 方言牛を右へ行かせる時のかけ声。山口
 県阿武郡見島768 (ほうせ) 土佐¹⁰⁴
 ぼう(「副」) (と)を伴って用いることもある。汽笛、

す笛の音。★若い人石坂洋次郎「上」二「築堤工事作業所のボーが鳩笛のやうに物憂い鳴音を」
 ぼう「接尾」人を表わす名詞に付けて、軽蔑した気持ち
 ぼく「大津波」夏目漱石「吾輩は猫である」二「おぼくは」

「越後っばうの機嫌を取るのサ」
 いつもの中間ぼう。・歌舞舞・八重霞曾我組糸・中慕
 ぼうあい ホフ・【法愛】『名』仏語。①法に対する執
 着。自分の得に善法と愛染する心。②長尺と少二

集九、二五「先づ世間の愛をすて、法愛までにするを仏道に入る人」とす。*大智度名法語「三毒法愛をば堅執してこれを行す」②二愛の一つ。真理としての法を求めること。↓餓鬼愛

ぼうーあい バウ：【芒鞋】『名』わらぐつ。草鞋（わらじ）。

芒鞋取次行、琳琅觸目路人驚」

ぼうあきのり　：あをのり、綠青海苔〔一名〕綠藻類アオサ科の海藻。各地の浅海の岩上に着生する。長さ五、三センチほど、時に数倍になる。幅五センチ弱ぐらい。緑色にも状で中空。食用としたり、紙にすきこまれたりする。〔開道ホアオノリ（種之団）〕

ぼうあきない　：あきない〔棒商〕〔一名〕天秤棒てんびんぼうで商品をかついで売り歩く商い。てんびんあき

ない。発遣ホーアキナイ。繪の王臣
 ぼうあく〔暴悪〕名（形動）①無理非道であること。乱暴で、非道であること。また、そのさま。*将門記「暴悪の為に倍す」*米沢本沙石集一・三「暴悪惡の族（やから）を調伏して、仏道に入れ給（ほウアク）の族（やから）を調伏して、仏道に入れ給

ふ」②非常に手荒であること。あらあらしいこと。
また、そのさま。＊三教指帰上「狼心假戾、不纏教誘、
虎性暴惡、匪羈礼義」＊三国伝記一五・六「獄卒等邪見
暴惡の声を以て大いに怒て申様」＊柳宗元「股太尉逸

事状二別人偷嗜一暴患者こ 〔盗歯〕文明 〔盗歯〕ボーク 〔盗歯〕ボーク

ぼうあけ 〔棒上〕〔名〕取引相場が一本調子に上がり続けること。 〔盗歯〕ボーク 〔盗歯〕

ぼうあし 〔棒足〕〔名〕文楽人形の演技の型。片足を力いっぱい踏み出して見得をする動作。この場合、多くは他方の足の膝を折って、そこに重心をかける。 〔盗歯〕ボーク 〔盗歯〕

ぼうあつ 〔防足〕〔名〕防ぎとどめること。＊小右記長和元年四月二七日相府立后事頻有妨遏之故

也」*代議政体永峰秀樹訳、二代議政体の防退すべからざる禍害を防退す」*後漢書「寇恂伝」率厲士馬「防二退它兵、勿令北度二而已」〔発音〕ホーアツ〔標マ〕〔京マ〕

ほうあつ【暴圧(名)】ひとと圧迫すること。暴力などで、押えつけること。人の行動などを、あらあらしく押えること。*人生に相渉るとは何の謂ぞ(北村透谷)『力』としての自然は、吾人を暴圧することを憚

ほうあつ ばう(膨)庄(名) 生きている細胞の膜系を通して出入りする電解質が細胞の内外で平衡に達している場合の細胞内の外液に対する圧力をいう。細胞

膜はこれによって一定の体積を示す。細胞の硬い組織はこの圧力によって細胞および組織の緊張状態を保ち、一定の体制を示すが、吸水量より蒸散量が多くなると圧力は低下し緊張状態を保てず、凋萎する。

ぼうあつというふうな、**膨圧運動**〔名〕植物体の運動の一つ。細胞または組織の膨圧変化に伴って起こる細胞の可逆的な体積、長さの変化による。屈曲、葉枕の就眠運動、気孔の開閉運動などに見られる。

る。
発音 ボーアツウンドー **標** アウ

めのぼう。高知市844②昆虫、あめんぼう（水黽）。大

分県直入郡⁹⁹ 〔発国ボアメ 儺⁷ 〇〕
 ぼう⁷あらい：あらひ棒洗¹〔名〕棒でかき混ぜて、中に
 入れた物を洗うこと。・雑俎・赤念は「大ぶんに・万
 部の椀や棒あらひ」〔発国ボアライ 儺⁷ 〇〕
 ほう⁷あん・ハツ：万案¹〔名〕方法についての考案。・雪
 中海〔未だ鉄腸〕下：「改正の方案を立つことは」
 ・吾輩は猫である〔夏目漱石〕一「案出した第一の方

ほう・あん【奉安】『名』尊いものを安置すること。新聞雑誌一四号明治四年九月、神器と列聖皇霊とをここに奉安し。〔発音ホー・アン〕〔類義〕〇余り〇

ほう・あん【ハフ】〔法案〕『名』法律の草案。＊社会百面相

内田魯庵代議士・下・濱職法案を出したものがあつたが〔発箇ホーアン（會）〇（京）〇〕
ほうあん【保安】■【名】「ほうあん（保安）」に同じ。
＊新聞雜誌「一」一〇・明治四年八月「之に憑（よ）つて産

業を営み其生を保安(ホウアン)するもの不_レ鮮と云ふ。

■平安時代、鳥羽・崇徳兩天皇の代の年号。元永三年(一一二〇)四月一日、天変、厄運により改元。保安五年(一一二四)四月三日天治と改元。●ロドリゲス日本大文典「Fean ホウアン」 〔開闢ホーアン 儻々(トウタウ)〕

ほうあん バウ：茅庵〔名〕茅かやで屋根を葺(ふ)いた、いおり。粗末ないおり。草庵、茅屋(ほうおく)。

・三国伝記四九「臨川三会茅庵(ホウあん)を縛んて慈氏の曉を期す」・五代史十馮道伝「居軍中爲二

茅庵ノ不設ノ牀席ニ 〔発音〕ホーアン 〔標〕①
ほうあんき 〔棒暗記〕「名」意味を考えないで、文章や
事項などをそのまま暗記すること。ただむやみに覚
えておくこと。 〔発音〕ホーアンキ 〔標〕② 〔京〕③

ほうあんじょ【奉安所】『名』御真影などを不敬のないようにして安置するところ。*太政官へ上司小剣・九（御宸影奉安所の前へ進むと）
【標名】〇〇ジ

ほうあんてん(奉安殿)『名』太平洋戦争終結前
で、御真影や教育勅語を不敬のないように保管する
ため校舎から離して設けた特別の建物。＊秋立つまで
で嘉村礒多（よしかみ いさた）「小学校に新築された御聖影奉安殿の

前に「【英】ホーランド【和】オランダ」
ほうい ハウキ『方位』『名』①ある方向が一定の基準
方向に対してどのような関係にあるかを示すこと
ば。東西南北を基準として、一六または三二方向に

凶分する。十二支によれば、北から東まわりに子(ね・丑(うし)・寅(とら)と十二等分し、また易(えき)では北から東まわりに、坎(かん)・艮(ごん)・震(しん)・巽(そん)・離(り)・坤(こん)・兌(だ)・乾(けん)と八等分する。歩兵操典第一〇七、又夜間(よる)に於ける簡単な

る方位判定の能力」*張衡—東京賦「弁ニ方位ニ而正」

その方向に向かつての吉凶を判断する術。吉方（え

ほう、金神(こんじん)、鬼門(きもん)の類。*人情本
春色梅児誉美・初・序。そも八将神の方位にそむか
ず建とは」〔築園ホーイ 愈々困 余々①
ほうい〕「布衣」①「はい(布衣)」に同じ。②
「はい(布衣)」に同じ。*今鏡・四宇治の川瀬「后の
宮には、冠にてこそ常は人々候ふを、これはほうい
になされてなむ侍し」*高野平本平家・一殿上聞計「鈴

の綱の(んに、布衣(ホウイ)の者の候は」〔発音ホウイ〕
イ〔標ア〕困今史江戸●○○余シ困〔古辞書〕大正
ほういに靴(か)の沓(くつ) 平服を着て儀式用の
はきものをはくこと。きわめて不似合なことのた
とえ。＊江戸職人歌合下「股引など待るめうつり

に霞地と侍るはほういにくわのくつといふ先達の
そしりまぬかれがたく」
ほうい ハウキ【包圍】『名』四方からとりまくこと。つ
つまかこむこと。★野分夏目漱石「四」霞の如き拍手

の中に包囲された一人坊っち」＊田舎教師由山花袋六「第一軍の追撃に逢つて全く包囲されて了つた」
 ㊦ 菑園ホーイ ㊧ 菑之困 ㊨ 念之 ㊩ ほうい ㊪ ハウキ ㊫ 邦威 ㊬ 名 国の威光。国威（こくい）。
 ㊭ 菑園ホーイ ㊮ 菑之困
 ㊯ ほうい ハウキ ㊰ 芳意 ㊱ 名 ①他人の親切な心を、敬つていう語。ありがたのお気持。厚意。芳志。芳情。＊菅家文草「四感白菊花、奉皇尚書平石丞、故人知我多芳意、所以孤叢異費鞭」＊平家一〇請文、昔の洪恩を

わすれ 芳意を存ぜず ②春のきざし。のどかな春の趣。＊白居易 惜玉藥花詩 芳意將 闌風又吹、白雲離 葉雪辭枝 〔癸酉ホーイ 儒之困 〕 〔古詩〕文明・易林

の宝衣・象馬を以て汝に与ふ。*陸倕・石闕銘「乃焚其綺席・棄彼宝衣」〔発音ホーイ 儼々困〕
ほうい、ホフ：〔法衣〕『名』「ほうえ〔法衣〕」に同じ。
*和英語林集成(初版)「Hōi ハフイ 法衣」〔発音ホー

ほうい：牛「宝位」《名》天子の位。宝祚（ほうそ）。
 *大安寺伽藍縁起并流記資財帳 天平一九年（寧楽遣
 文）「今汝登ノ極位、授奉宝位」*三国伝記六一「天下

を統攝し、宝位尊に持て、国土に敵無し」*魏書肅宗紀「朕以冲眇、纂三承宝位、夙夜惟寅、若涉淵海」
 〔発音〕ホーイ・標之困 〔古辞書書言〕
 ほうい、ハウキ「抱用」〔名〕両手でだきかむこと。ま

ほうふキ 法位〔名〕仏語。①迷いの境地に相對する永久絶對の真理。真如・法性のこと。*往生要集・大文四・生如・是方便・是時、便得入・善薩法位・住・阿鞞跋致地と。*正法眼藏・山水經・ともに法位に住し

て、究尽の功徳を成ぜり。・法華經「方便品」是法住三法位、世間相常住。②僧の位階。僧位。・鑑真大師八帝皇少成の智徳を以て、国師とする時、高麗著年の僧皆就て受学、悉いて下に座す。唐国の法位皆な如此。〔開園ホーイ 倉之図〕

ほうい ほうい 法威 仏語。仏法の威力。教法の勢威。・古今著聞集一・五「皇威も法威もめでたかりけるかな」〔開園ホーイ 倉之図〕

ほうい ほうい 法意 法の定める所。法の趣意。法規。・続日本紀「天平六年一月戊寅「比来出家不審学業、多由囑請、甚乖法意」・天平記「五持明院殿御代事、如法意、勸進して非融融儀、神道は無き物にてこそ候へ」〔開園ホーイ 倉之図〕

ほうい ほうい 胎衣 胎児をつんでいる膜と胎盤。えな。ほうえ。・権記「寛弘五年九月二六日「此夕子別又誕男児、胎衣不旱下、然而切取結着母氏股」・南史「王敬則伝「敬則生時胎衣紫色、応得鳴鼓角」〔開園ホーイ 倉之図〕

ほうい ほうい 鳳凰 天子の座を囲む美しい衝立（ついで）や屏風（びょうぶ）。転じて、天子の座。玉座。・菅家後集「叙意一百韻「兢々鳳凰、懷々龍泉」・玉葉文治二年七月二七日「只以先賢之風、推當輔佐之任、負鳳凰於明堂之位」・徐陵「勸進梁元帝表「揚龍旂、以饗帝、御鳳凰、以承天」

ほうい ほうい 鳳凰 遠くに離れた場所にいる人に呼びかけるときに発する語。おおい。・虎明本狂言「薩摩守舟がこちにひ、むかひにみゆる程によぶふ。ほういほうい」・風々寺田寅彦「何処かでホーイと人を呼ぶ声が」〔開園ホーイ 倉之図〕

ほうい ほうい 鹿島 鹿島群島。②山野で遠くの人と呼びかけること。青森県三戸郡五戸118 ③遠くの人に呼びかける時のこと。おおい。高知県842 ④遠くの人に呼びかける時のこと。おおい。高知県842 ⑤返事のこと。徳島県海部郡牟岐809

ほうい ほうい 伊勢 賀茂、春日などの神職家で、神殿にはいることをゆるされた二位、三位をいう。〔開園ホーイ 倉之図〕

ほうい ほうい 房帷 へやのとおり。寝室のとおり。また、閨房。・魚玄機「森闌外」「房帷（ハウキ）の欲ではない」

ほうい ほうい 傍意 副次的な意義。・開化本論「吉岡徳明」上五「一は以下も所有を保護するの費用とすは則ち貢租の傍意なり」〔開園ホーイ 倉之図〕

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

ほうい ほうい 暴威 暴風。物毎に此の心は有るべし、能々正意傍意の心え有るべき也。・高野本紹巴教書「傍意之暴。わたり寝の野べに寒さゆる山風、北原かけし葉もかりしめや。心に私なく其の理を頭（あ）けし暴にや」

巻本和名抄一五、僧位階法印大和尚位(僧正位)
 ほういんちよう、テウ(鳳音調)〔名〕「かみむちよう
 (上無調)」に同じ。・壺羹抄一七「鳳音調(ホウインテ
 ウ)是云三上无調」・拾芥抄上末・音楽部十月上
 無(かみむ)調(八号三鳳音調)ⅴ
 ほういんづか ホウイン：〔法印塚〕〔名〕 追われた法印
 が隠れた、生き埋めにされたなどの伝説をもつ塚。
 またその伝説。〔開函ホーインズカ 〱
 ほういんばうしよく〔暴飲暴食〕〔名〕 度を過ぎして
 飲食すること。〔開函ホーインボーシヨク 〱
 〱
 ほういんばし ホウイン：〔法印干〕〔名〕 刈り取った稲
 を束ね、穂を上にして地面に立てかけて干す乾燥法
 を、群馬県利根郡などという。
 ほういっつ ホフ：〔法字〕〔名〕てら。寺院。・文華秀麗集
 中和光法師遊東山之作、嵯峨天皇、法字云經久、深
 山乞食事、源平盛衰記一〇、三井寺戒壇不許事、是
 郡国の重事、法字之要害也」・梁簡文帝、神山寺碑銘
 「過彼高巖、構三教法字」 〔開函ホーウ 〱
 ほういっつ ホフ：〔法雨〕〔名〕 ①仏語。仏法が、あまねく衆
 生を救うのを雨が万物を潤すのにたとえていう語。
 のりのあめ。・性靈集五・請越州節度使内外文書啓
 「能仁無垢、法雨西灑」・太平記二・七・田樂事、天龍八
 部悉靈神の威を助て、清淨の法雨を灌ぎける」・法華
 經・華嚴品「我雨法相山、充滿世間」 ②救いの
 雨。慈雨。・幻集・相山西堂、且好大雲施法雨、數榮
 草木潤昆蟲」・浄瑠璃・出世景清道行、此水は親音の
 甘露はうと覺へたり」 〔開函ホーウ 〱
 ほういっつ パウ：〔防雨〕〔名〕 雨にぬれることにより起こ
 る害を防ぐため、雨にぬれないようにすること。
 〔開函ホーウ 〱
 ほういっつ パウ：〔茅宇〕〔名〕 茅(かや)ぶきの家。また、あ
 ばら屋。茅屋。・臥牛集・秋夜雨、秋雲漠漠昏茅宇、落
 葉蕭蕭塞塵土」・王勃・贈李十四詩、野客思茅宇、山
 人愛竹林」 〔開函ホーウ 〱
 ほういっつ 〔暴雨〕〔名〕 激しく降る雨。急に激しく降る
 雨。・性靈集一五、為大使与福州觀察使書、既許本涯、
 比及中途、暴雨穿帆、戕風折柁」・礼記・月令、霖風暴
 雨総至」 〔開函ホーウ 〱
 ほういっつ 〔棒打〕〔名〕 ①「ふか(浮棒)」に同じ。
 ②釣りで、多く垂直に立てて魚信をとる棒状のう
 き。立浮(たちうき)。〔開函ホーウキ 〱
 ほういっつ まきせいん ぼうづき 〔棒渦巻星雲〕
 〔名〕 銀河系外星雲の一つ。中心核から対称につき
 出した二本の腕の先端が渦巻状を呈するもの。棒状
 渦巻星雲、門(かんぬき)型渦状星雲、棒渦状星雲など
 とも呼ばれる。〔開函ホーウズマキセイん 〱
 ほういっつ 〔棒打〕〔名〕 棒で打つこと。棒で打ち
 合うこと。・結城氏新法度一八条さぶらい下人をきらはは
 ずとりつみ、はうちになすべし」・歌舞伎・男伊

達初賀賀我上「正真のかったいと棒打だ」(因圓の子どもとの遊び。ねっさうち。静岡県磐田郡水窪568の蕎麦や麦などの脱穀作業。群馬県勢多郡233 長野県514 陶麦・棒打ウチ 繪之因)
 ほうりり「棒売」(名) 棒の行商人。*雑俳・柳多留「一五九呼びにくひそうで棒売呼もせず」
 ほうりん ハウ：「芳雲」(名) かぐわしい雲。春の雲についていう。*東京新繁昌記(服部誠一)「二・京橋煉化石・春は則ち肆店の芳雲の間に開いて芳香馥鬱」(因圓ホーウン 繪之因)
 ほうりん ハウ：「邦運」(名) 自国の運命。わが国の運命。*当世文学の潮模樣(北村透谷)「邦運の斯に進めるを賀し」(因圓ホーウン 繪之因)
 ほうりん「宝運」(名) 天子の運命を尊んでいう語。聖運。*憲法類編「一四・祭典(古事類苑・神祇七)」「加・道場寺に住して教化につとめ、晩年には六合山寺に隠れた。漢訳仏典に新無量寿經・仏本行經など。四四〇九年没。(因圓ホーウン 繪之因)
 ほうりん いん ホウキン「法雲院」京都府相楽郡加茂茂町にある浄瑠璃寺の称号。(因圓ホーウンイン 繪之因)
 ほうりんじ ホフウンジ「法雲地」(名) 仏語。菩薩の十地の第一〇位。悲智の妙雲が真理の雨を降らせてあまねく衆生界にそそぐところからいう。
 ほうえ「布衣」(名)「はい(布衣)に同じ。(因圓ホー工 繪之因)
 ほうえ「宝衣」(名) ①袈裟の美称。*観仏三昧海經七・各脱宝衣競以仏窟 ②むほうい(宝衣。(因圓ホー工 繪之因)
 ほうえ ホフエ「法会」(名) 仏語。經典を講説・読誦すること。また、その集まり。法華会・最勝会など。広義には仏事・法要を含み、仏菩薩を供養し、仏法を説き、また、読誦して死者の追善供養をする。また、その行事・集会。法義。*靈異記(中・一五)「法会を蔽ひ誦はり、明日供せむとして」御伽草子・三人法師「ほうえの座に至り」*法華經・隨喜功德品「若人於法會・得聞此經典」(因圓ホー工 繪之因 余之因)
 ほうえの七僧(しちそう) 仏語。法会の時七人の役僧。すなわち、講師・読誦・呪願師・礼師・唄師・散華師・堂衆。*書言字考節用集「一〇」法会七僧 ホフエシチソウ 講師・読誦・呪願師・三礼・唄師・散花・堂達」(因圓書言)
 ほうえの舞(まい) 江戸初期以前、多武峰八講猿

楽の「翁」の中で舞われる乱拍子のある特殊な舞
現在観世流「翁」の演出の一つで、翁舞に乱拍子が
加わる特別なもの。江戸末期以降追善興行の際の
「翁」とされる。随筆・戴思記「上」しらはやし、は
うゑの舞、弓やのたちあひなど、彼道に秘伝は
る大事とをもえ。*わらんべ草一「十二月の往来は
うゑの舞、せいのう、色々十六番のなりひあり」
ほうゑ ホフ：「法衣」【名】 仏語。僧尼の着る衣服。も
と律法に定められた五条七条九条ないし二五条の
三衣をいったが、わが国ではさらにこの三衣の下に
着る俗服などもを含めた総称。法服。ころも。
のりころも。ほうゑい。醍醐寺本元興寺伽藍縁起并
流記資財帳天平一九年「至都波岐市長屋時、脱其法
衣破滅仏法。源平盛衰記一八法皇三井瀬門事」五帖
の法衣（ホフ）身にまとへり。円光大師行画図覽
讀三九四分律に袈裟を法衣と名づく。開箇ホ
工 衾之困 衾之困 固録書言
ほうゑ ホフ：「胞衣」【名】「ほうい（胞衣）」に同じ。・日
葡辞書「Ego.ホウエ」エナ。開箇ホー工 衾之困
固録書下学
ほうゑ ホフ：「大家」【名】「開箇」大家（おおよ）。伊豆八丈す。・
鳥32 ②戸主の住む棟。母屋。八丈鳥312
ほうゑい ハウ：「芳詠・芳吟」【名】 他人の詩歌を尊ん
でいう語。芳吟。開箇ホー工 衾之困
ほうゑい ハウ：「放映」【名】 報道音楽講演演劇ス
ポーツなどの番組をテレビの電波にのせて送るこ
と。また、特に、映画フィルムをテレビで放送するこ
と。開箇ホー工 衾之困
ほうゑい ハウ：「泡影」【名】 水のあわと物の影。はか
なくとりとめのない物事のたとえいう語。ほうよよ
う。蘇題「長安西明寺塔碑」歎「不居之歲月、無不滅
之泡影」開箇ホー工 衾之困
ほうゑい 宝：「江戸時代、東山・中御門兩天皇の代の
年号。元祿一七年（一七〇四）三月一三日に改元。宝
永八年（一七一）四月二五日に至って次の正徳とな
る。出典は「唐書志」の「宝祚惟永、暉光日新」。開箇
ホー工 衾之困
ほうゑい 蓬：「蓬瀛」 中国で神山とされた蓬萊（ほうら
い）と瀛州（えいじゅう）。・懷風藻遊龍門山「葛野
王、阿得王喬追、控鶴入蓬瀛」。謝惠連「燕歌行」接
翻偶「羽衣蓬瀛、仇旅旅類相和鳴」
ほうゑい バウ：「防衛」【名】 ふせぎまゐること。・先
代旧事本紀三・天神本紀「誘欺防拒、而令治平、令
三十二人並爲防衛、天降供奉矣」。・民法明治二九
年七二〇条「自己又は第三者の權利を防衛する」
*拾遺記「蜀故來獲却此火、當使財物不、自今、
以後、亦宜防衛」。開箇ホー工 衾之困 衾之困
ほうゑい お：「お宝」【名】 江戸時代、宝
永七年（一七一〇）小判と同時に発行された一分通用
金貨。品位は慶長一分金と同じ千分中金八四二・九

であるが、重量は半量の〇・六二五匁(二・三四匁)裏面の右上部に「乾」の字が打たれているので「乾字一分金」とも呼ばれた。

ほうえいしちようぎん：チャウギン【宝永永字丁銀】

【名】江戸時代、宝永七年(一七二〇)三月から豆板銀とともに鋳造発行されたなまこ型の不定量銀貨。品位は千分中銀四〇〇。享保七年(一七二二)に通用を禁止された。表面に「宝」の字の極印二個のほか、小型の「永」字極印が打刻されているので、「永字銀」または「永中銀」と呼ばれた。

ほうえいしちようぎん【宝永永字豆板銀】

【名】江戸時代、宝永七年(一七二〇)三月、丁銀と同時に鋳造発行された小円塊の不定量銀貨。品位は千分中銀四〇〇。享保七年(一七二二)通用を禁止された。

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

ほうえいしちようぎん【宝永永字】

部または全部を出動させること。【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

享保七年(一七二二)通用を禁止された。「宝永二宝豆板銀」とも。

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

正月一日「主上御元服也略」加冠後入御、著縫袷袍、著替下襦。【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】

ほうえいしちようぎん【宝永永字銀】



貿易銀

かし明治一年には、もとの四一六グリーンにもどし、形式も七年改正のものと同式にあらためると共に、国内でも一円銀貨として通用されることになった。同三年四月一日限り国内での通用を禁止。以上の三種のうち明治八年改正のものだけに「貿易銀」の文字があるので、これだけを「貿易銀」ということもある。〔開函ボーエキギン〕

ほうえきぎんこう：ギンカウ「貿易銀行」〔名〕貿易金融を行なう機関。東京銀行、日本輸出入銀行の類。*社会百面相「内田魯庵増税・上貿易銀行は海外支店の資金を悉く吸集して」〔開函ボーエキギン〕

ほうえきぎんゆう「貿易金融」〔名〕輸出入貿易に伴う必要資金やそれに関連した資金の融通。〔開函ボーエキギン〕

ほうえきこう：カウ「貿易港」〔名〕商港のうち、外国との貿易、すなわち、商品の輸出入を許可された港。〔開函ボーエキギン〕

ほうえきこうだん「貿易公団」第二次世界大戦後の貿易再開に際し、国の定める輸出入計画に従い、輸出入に関する業務を行なう目的で昭和二十二年（一九四七）に設立された全額政府出資の特殊法人。食料貿易公団、原材料貿易公団、鉱工業貿易公団、繊維貿易公団の四つがあった。同二十四年から二六年にかけてそれぞれ解散した。〔開函ボーエキギン〕

ほうえききくもつ「貿易作物」〔名〕栽培者が収穫後、販売までに比較的多くの時間を要し、貿易品として遠隔の地に輸送するのに適する農作物。タバコ、藍（あい）、油菜の類。〔開函ボーエキギン〕

ほうえきじむかん：シムカン「貿易事務官」〔名〕領事官を置かない地に置き、領事の職務を行なう委任官。*外交官及領事官官制明治三二年六条「領事官を置かざる地に於ては貿易事務官を置くことを得」〔開函ボーエキギン〕

ほうえきじゅうか：ジウカ「貿易自由化」〔名〕商品の輸出入に関する種々の制限を撤廃し、貿易面での各国間の交流を自由にする。〔開函ボーエキギン〕

ほうえきしゅうし：シウシ「貿易収支」〔名〕一定期間における商品の輸出入取引によって生じる国際収支。貿易外収支とともに国際収支の經常勘定を構成する。広義には貿易外収支を含めて用いられる。〔開函ボーエキギン〕

ほうえきしゅう：シウ「貿易商」〔名〕外国貿易を業とすること。また、それを業とする人や会社など。*夢喰ふ虫「谷崎潤一郎」二「内地の貿易商に仕事を取られて」〔開函ボーエキギン〕

ほうえきしゅうしゃ：シウシャ「貿易商社」〔名〕外国貿易を業とすることを目的として作られた商事会社。明治二年（一八六九）二月、政府が、横浜、東京における外国貿易の振興のために、三井八郎右衛門を総取組として東京に設立したものが最初。〔開函ボーエキギン〕

ほうえきじり「貿易尻」〔名〕貿易収支の帳尻（ちようじり）。一国の一定期間の輸出入額と輸入額との差し引き。〔開函ボーエキギン〕

ほうえきせん「貿易船」〔名〕貿易のために用いる船舶。交易船。*夜明け前「島崎藤村」第一部上・四一「たまたま入港する外国の貿易船があつても」〔開函ボーエキギン〕

ほうえきてがた「貿易手形」①輸出入貿易に伴って振り出される手形。②輸出入貿易に伴って生ずる国内金融関係の手形。輸出品の生産、集荷に必要な資金の調達、輸入代金決済などのために振り出す手形。〔開函ボーエキギン〕

ほうえきふう「貿易風」〔名〕中緯度高圧帯から、赤道低圧帯に向かって吹く大規模な東寄りの風。風向は地球の自転によって北半球では北東、南半球では南東となる。昔、貿易船がこの風を利用したところから名称。恒風。恒信風。〔開函ボーエキギン〕

ほうえきふうたい「貿易風帯」〔名〕赤道から中緯度地方にかけて、帯状に地球を取り巻いて存在する貿易風の卓越した地域。主として海上に限られる。〔開函ボーエキギン〕

ほうえつ「法悦」〔名〕①仏語。仏法を聞き、または味わつてよること。法喜。*出家とその弟子「倉田百三二」二「法悦といふ事に就いて話さうと考へてゐます」②うつとりするような悦（よろこび）。陶酔。*邪宗門「北原白秋」外光と印象・條のふたと「声もなき悲願の通夜のすりなき 薄らの間に深みゆく、あはれ、法悦」〔開函ボーエキギン〕

ほうえつ「法悦」〔名〕①仏語。仏法を聞き、または味わつてよること。法喜。*出家とその弟子「倉田百三二」二「法悦といふ事に就いて話さうと考へてゐます」②うつとりするような悦（よろこび）。陶酔。*邪宗門「北原白秋」外光と印象・條のふたと「声もなき悲願の通夜のすりなき 薄らの間に深みゆく、あはれ、法悦」〔開函ボーエキギン〕

ほうえん「ハウン」〔名〕方形と円形。四角と丸。*性霊集「一・徒懷玉「方円人法、不如然」」*名語記「二・連哥の御会侍りけるに、方円を賦せられしきに」*文明論の概略「福沢諭吉」二四「其定則の正しき」と実物の方円を見るが如く。*孟子「離婁上」規矩方

員之至也」〔開函ボーエキギン〕

ほうえんの器うつわに從う。水はいれものしだいで、四角にも丸にもどうにでも形を変える。転じて、人は環境や友達によつて、善ともなり悪ともなる。意。水は方円の器に從う。*滑稽本・浮世風呂前上「方円の器に隨ふ道理を悟りて」

ほうえんの陣取（じんとり）。陣法（じんぽう）の一種。敵が鋒矢の備えで突進してくるため、これを包んで討つか、左右にはずすための備え。敵地に侵入した際八方からの夜襲に對して備えるもの。ほうよう。*鈴録「方陣陣取の事、方陣の陣取と言ふは黃帝立つ所の陣法なり」

ほうえん「ハウン」〔名〕①かんばしく美しいこと。*明倫往來「上本「自或所給葉玉、旋作以三百草之花、貫以五色之線、摸草虫形、栖其花房、芳艷之美有與有感」②美人の形容。*色葉字類抄「芳艷美女分ハウン」〔開函ボーエキギン〕

ほうえん「ハウン」〔名〕「ほういん法印」の変化した語。*落本・品川楊枝「あすのあさほうあんさまにきとうをしてみたらアア」

ほうえん「ハウン」〔名〕仏語。仏法を説く所。説法の席。經典を講じたり、法話したりする集まり。また、法事の席。法座。*家伝上「家業遺文」二「毎年十月、莊嚴法筵、仰維摩之景行、俳諧、俳諧十三条、序、夢太なかりせば、何ぞけふの法筵の盛なるあらんや」*張九齡「冬中至玉泉山寺詩」石壁閑「精舍、金光照法筵」〔開函ボーエキギン〕

ほうえん「ハウン」〔名〕仏語。①仏法に會う縁。仏縁。*妙好人伝「初上和州清九郎」法縁ホフエンを慕ふことと飢て食をのぞみ渴して水を思ふがごとし。*南本涅槃經「一四「法縁者不見父母妻子親屬見一切法皆從縁生是名法縁」②法を縁とする慈悲。*坂東本教行信証「五「慈悲有三縁、一者衆生縁は慈悲、二者法縁は慈悲、三者無縁は慈悲」

ほうえん「ハウン」〔名〕大砲を発射する時に出る煙。*西洋道中「陳栗毛給生寛」一三下「炮煙天に漲り」〔開函ボーエキギン〕

ほうえん「煙煙」〔名〕のろしの煙。のろし。*經國美談「矢野龍溪後」一八「煙煙或は旗号の合図を設け」*席子「奉和聖製送張説巡遊詩」春冬見嚴雪、朝夕候煙煙」〔開函ボーエキギン〕

かえしをすること。*譬喻「五「箭（や）の下に亡びし狐報怨（ホウエン）する」と不能」*近世紀聞染崎延房「肥後守の守宮にあらねば報怨（ハウン）の儀に聞かずとて」〔開函ボーエキギン〕

ほうえん「豊艶」〔名〕形動。ふくよかで美しいこと。また、そのさま。*司馬相如「美人賦」臣之東隣有二女子、雲髮豐艶、蛾眉皓齒」〔開函ボーエキギン〕

ほうえん「保延」平安時代、崇徳天皇の代の年号。長承四年（一一三五）四月二七日飢饉、疫疾、洪水により改元。保延七年（一一四一）七月一〇日に至つて次の永治となる。出典は「文選の王延寿「魯靈光殿賦」の「永安寧以祉福長与三太漢」而久存、実至尊之所御保、延寿、而宜子孫にに」〔開函ボーエキギン〕

ほうえん「防炎」〔名〕炎（は）のおを防ぐこと。火がついて炎となつて燃えあがるのを防ぐこと。〔開函ボーエキギン〕

ほうえん「防援」〔名〕①ふせぎたすけること。*文明本節用集「防援ハウン」②囚人を監視・護送すること。また、その任務を与えられた人。*令義四「断罪条、決大群罪人、皆防援着、枷至三刑所、略略、囚人防援廿人、毎二囚加五人」*延喜式「四六・左右衛門「凡提人防援火長七人、三人守獄所未弾人、四人領著欽因」*三代実録「貞観五年七月二六日因獄司著欽因人毆傷防援右兵衛百濟豊国、于時以左兵衛二人、右兵衛二人、為左右囚人防援」〔開函ボーエキギン〕

ほうえん「茅檐」〔名〕茅（かや）の意。茅（かや）ぶきの家の軒。転じて、茅屋。あばらや。*本朝無題詩「六、秋日山居即事「輔仁親王、茅簷有月光相序、蓬髪与霜色自知」」*中華若木詩抄上「吾家は茅檐なれども」*陶淵明「飲酒二十首詩」其九「輕羅扇簷下未足為高棲」〔開函ボーエキギン〕

ほうえん「望遠」〔名〕①遠くを見ること。②ほうえんレンズ（望遠）の略。〔開函ボーエキギン〕

ほうえん「帽簷」〔名〕帽子のふち。*李商隱「席代官妓贈同從事詩「新人橋上著春衫、旧主江辺側帽簷」

ほうえん「ハウン」〔名〕「報怨以德」〔名〕うらみをかえすのに徳業であったこと。〔開函ボーエキギン〕

政大臣朕が大師に、法王の位授けまつらくと勅りたまふ天皇が御命を、諸國食さへと宣る。日本後紀延暦一八年二月乙未、此時僧道鏡得幸於天皇、出入警蹕、一擬乘輿、号曰「法王」。

①に同じ。・中右記承徳元年四月二〇日未時許從内退出、若狭守敦兼同車、行向七条、次參法王御所、晚頭帟宅。

④親王之唐名。・運步色葉、法王。親王之御唐名。

⑤ローマ・カトリック教会の最高の聖職。羅馬の法王。教皇。・文明論之概略・福沢諭吉四・八八。閻闍大王・えんまいだいおうの別名。〔闍園・ホー・オー・會之団・余之団〕

ほうおう ホウワウ【法皇】《名》①仏門にはいった上皇を敬つていう語。太上法皇。法王。・古今・雜上・九一九・詞書、法皇西川におはしましたりける日。・太平記・四・一宮并妙法院二品親王御事、還幸以前に先帝をば法皇に成し奉るべきとて。

②「ほうおう」は法皇に同じ。・性靈集七・為荒城大夫奉造幡上、仏像願文・覺樹法皇、入微塵以无始。・三帖和讃・高僧傳・如來は無上法皇なり。

③「ほうおう」は法王に同じ。・靈異記下・三八・同じ時に道鏡法師を以て法皇とし。・名語記・六・初は道鏡法師、後には法皇と申しけるとかや。〔闍園・ホー・オー・會之団・今忠江戸・〇〇〇〇・余之団〕

〔註・國語彙編・易林・書言〕

ほうおう ハウー【訪欧】《名》ヨーロッパを訪問すること。〔闍園・ホー・オー・會之団〕

ほうおう【報応】《名》仏語。①行為に対するむくい。応報。・性靈集・九・高野寺鐘知識文、所謂、頭數者、報応化身之経是也。・遠羅天釜・贈遠方之病僧書、因果を信ぜず報応を恐れず。

②仏身を法身・報身・応身の三種に分けるもの報身と応身。ほうおう：ワウ【蜂王】《名》女王蜂。・李邕・嵩嶽寺碑序・「作」れ者便登獅子、明邊者更撰蜂王。

ほうおう：ワウ【鳳凰】《名》①古代中国で、麟・龜・龍とともに四瑞の一つとして尊ばれた想像上の瑞鳥。形は、前は麟、後ろは鹿、頭は蛇、尾は魚、背は龜、頸（あご）は燕嘴（くちばし）は鶏に似て、高さ五、六尺（一・五一・八）ほど、羽には五色の紋がある。梧桐に宿り、竹の実を食し、醴泉（れいせん）の水を飲んで、聖天子出生の瑞兆として出現すると伝えられた。雄を鳳、雌を凰と分けて称することもある。鳳鳥。・性靈集・三・贈伴按察平章事赴陸府詩・麒麟不踏昆蟲。鳳凰來東阿閭。・十卷・本名和名抄七・鳳凰、爾雅云・雄曰鳳、雌曰凰、人俦三其首。・羽虫之長也。・源平盛衰記・一・清盛息女事、其うぶやの前に鳳凰（ホウワウ）の千尋の竹に居たるを、



鳳凰 〔奈良泉 南法華寺 碑〕



鳳凰①〈奈良県 南法華寺 碑〉

かせ給ひたりけるが」・詩経「大雅・卷阿」・鳳凰于飛・翾翾其羽・伝・鳳凰、靈鳥、仁瑞也、雄曰・鳳、雌曰・凰、②紋所の一つ。①の姿を図案化したもので、鳳凰の丸、桐に鳳凰などがある。③香の名の一つ。後陽成天皇の勅旨によって選ばれた二〇〇種の名香の一つ。④「霜箱（うちか）に金糸で①を刺繍したものを着ていることが多かったところから」江戸時代、吉原遊郭で、太夫職の遊女の称。鳳凰。ほうお。雑俳、柳多留「二八・鳳凰か一日鷺に化て出る」・関宿ホー・オー・（鶴之団・余之書）
 ①・（国語図色葉下字・文明・伊京・明応・天正・建徳・黒本・鳥林・書）
 ほうおう 群鶏（ぐんけい）と食（しょく）を爭わず
 俗界を超越し、孤高を貫くことのとえ。・毒朱唇（幸田露伴）・流石が鳳凰（ホウワウ）群鶏（ぐんけい）と食を爭はず 一途に高尚の想像に耽り玉ひ
 ほうおうの 間（ま） 明治・正殿に次ぐ部屋で、宮城内宮殿の一室の称呼。二階に成り、東西四間、南北六間、四方に鳳凰飛翔の画が描かれていた。親任式・勲章親授式や公的謁見、また政始・歌会始・御講書始などの儀式に使用された。昭和二年（一九四五）戦災により焼失。
 ほうおの 丸（まる） 紋所の一つ。鳳凰が羽を開いている姿を、円形に図案化したもの。・浄瑠璃・賀久教信七墓廻「三・聞へた聞へた紋所へ略・鳳凰の丸・扇の九手をつくしてぞ染なせり」
 ほうおう・ワウ【暴王】^{〔名〕} 横暴な王。・経国美談「矢野龍溪」後・三回「胆略を以て事を処し暴王を屈折せしめんと欲し」・（関宿ホー・オー・鶴之団）
 ほうおう・ワウ【暴横】^{〔名〕}（形動） 乱暴でわがままかたくなこと。また、横暴。・明六雜誌「四三號・尊王攘夷説・阪谷素」・暴横恣睢、其我意を張る醉狂人の如く」・平民新聞「明治四〇年二月五日・余が思想の変化」・幸徳秋水「暴横なる権力階級は」・後漢書・馮異伝「今諸將皆壯士屈起多暴横、独劉將軍所到不亡虜掠」・（関宿ホー・オー・鶴之団）
 ほうおうじ・ホウワウ【鳳凰座】 南天の星座。彫刻・星座の南にあり、不死鳥（フェニックス）をかたどる。アルファ星は光度二・四等。・（関宿ホー・オーザ・鶴之団）
 ほうおうしん・ホウワウ【鳳凰山】 山梨県北碓市の西端にそびえる地蔵ヶ岳（二七八〇）以、観音ヶ岳（二八四一）以、薬師ヶ岳（二七六二）の三山の総称。鳳凰山。三山。・（関宿ホー・オーザン・鶴之団）
 ほうおうじ・ホウワウ【法王子】^{〔名〕} 仏語。菩薩の称。仏法王の子と見做しているところから、文殊が菩薩のうち最もすぐれているところから、文殊菩薩をいうこともある。・寂照堂公磐集「一・経称二文殊・為法王子・阿彌陀経隨聞講録・智論云、仏為三法王・菩薩



服法



入正法位乃至十地悉名法王子、乃知此名該下諸位。

ほうおうすぎ ホウワウ：【鳳凰杉】『名』植物「よれすぎ」の異名。〔発音〕ホーオーズギ 〔名〕植物

ほうおうそう ホウワウサウ【鳳凰草】『名』植物「こうおうそう」紅黃草の異名。〔方言植物〕①のこぎりそう（鋸草）。仙台¹⁶ ②はこねした（箱根羊歯）。甲斐河口¹⁷（ほうおうはぎ）駿河¹⁸ 〔発音〕ホーオーソー

ほうおうだい ホウワウ：【鳳凰台】中国の台の名。鳳凰が飛来したとして築かれたもので、各地に存在する。〔現在〕の陝西省鶏鳴東南にあった台。春秋時代、秦の穆公の娘弄玉の嫁した蕭史が簫を吹くと、鳳凰が飛来したので、穆公が築いたもの。鳳台。*曾我物語一「箱根にて仏事の事」穆公の弄玉を重んぜしも、徒らにはうわだいたいの月に寄す」〔現在〕の南京の東南隅にあった台。六朝宋の都がここにあったとき、五色の鳥が飛来したのを、時の人が鳳凰であるとして築いたもの。*李白「登金陵鳳凰台詩」鳳凰台上鳳凰遊、鳳去台空江自流」 〔発音〕ホーオーダイ

ほうおうちく ホウワウ：【鳳凰竹】『名』ホウライチクの葉の小さい変種。觀賞用に栽植される。高さ約二丈。茎は密生し、枝の形が鳥の尾に似ている。葉は枝先に羽状につき長さ一―六センチ。ほうびちく。*和漢三才図会八五、鳳尾竹（ほうびちく）鳳凰竹俗」 〔発音〕ホーオーチョウ

ほうおうちよう ホフワウチャウ【法王庁】ローマカトリック教会行政およびバチカン帝国統治の中央機関。ローマ法王庁。 〔発音〕ホーオーチョー

ほうおうていせつ ホフワウテイセツ【法王帝説】「じょうぐうしょう」とくほうおうていせつ（上宮聖徳法王帝説）に同じ。 〔発音〕ホーオーテセツ

ほうおうどう ホウワウダウ【鳳凰堂】京都府宇治市にある朝日山平野等の阿彌陀堂の称。国宝。 〔発音〕ホーオー

ほうおうひば ホウワウ：【鳳凰檜葉】『名』コノテガシワの栽培変種。樹容はやや球状。葉は疎に交互対生し線形で碧灰色。觀賞用に庭園に栽植される。 〔発音〕ホーオーヒバ

ほうおうばく ホウワウ：【鳳凰木】『名』マメ科の常緑高木。マダガスカル島原産で、熱帯地方では街路樹にされる。高さ六一―一二丈。樹冠は傘状。葉は二回羽状複葉で長さ三〇―六〇センチ。羽片は一〇―二〇対。各羽片は長さ約一センチの長橢圓形の小葉を多数つける。花は枝先に総状に集まって咲き、径約一〇センチ。花弁は五枚でほぼ同形、鮮紅色で上弁には黄色の条線があり美しい。豆果は長さ一五―一六センチ。 〔発音〕ホーオーボク

ほうおうまる ホウワウ丸〔鳳凰丸〕 徳川幕府が大船建造禁止を解除するとともに、みずから浦賀で建造した本格的な西洋型軍艦の名。嘉永七年（一八五四）完成し、龍骨長一〇七尺（約三・四メートル）、横幅三五四尺（約一〇・六メートル）、深さ一五五尺（約四・五メートル）の三檣バーク型帆船で、大筒四門、中筒六門を装備した画期的なもので、船体外面を朱塗り、船首尾に鳳凰の彫刻を施した華麗な船。＊鳳凰丸・昇平丸御軍艦記事、夫より目付案は跡より、外は赤船に乘移り、鳳凰丸之模様御見分にて。〔発出ホー・オーマル〕（繪芝団）

新田左兵衛佐義興自害事、私の茅屋（パウヤク）へ御入り候うて、草深き庭の月を御覧候へかし。」*
 維・答張五弟詩、終南有茅屋、前対終南山し。
 ポーオク 翁之 余之 古詩集・芭蕉・猿蓑 書言
 ぼう・おく・パウ・「望屋」「名」能楽で、世阿彌が音曲の調子をあらわすのに用いた語。強く率直な明るい曲趣の祝言音曲に対して、弱く繊細で、幽曲・恋慕・哀傷など悲しみの情を中心とした曲趣の音曲をいう。*詩経の「亡国之音」を言い換えた語と考えられる。亡・「亡」憶とも書かれるが、室町後期には、物哀れな侘

自害事「生前の芳恩を死後に報ぜんと存ずる也」
 〔開道ホーオン 〔音〕① 〔古語箋文明天正・續讀・易林・書言〕
 ほう・おん ホフ・〔法音〕② 仏語。説法または読經の
 声。＊性靈集三・和尚中寿感興詩「禽獸卉木、皆是法
 音」＊榮花玉集のうてな、慈悲の相好は眼にあり、法音
 の相は口にあり」＊法華經・譬喻品「今從世尊聞此
 法音、心懷勇躍得未曾有」〔開道ホーオン 〔音〕②
 ① 〔古語箋文明〕
 ほう・おん ホフ・〔法恩〕③ 仏語。四恩の一つ。三宝
 の恩をいう。＊続日本紀・天平一五年一〇月辛巳「雖

ほうおんええ：【報恩会】一名「日蓮宗で、一月一三日の日、日蓮上人の忌日に行なう法会。おえしき。御命講。・東都歳事記」一〇月八日「法華宗寺院御影供法会。八報恩会また会式といふ。当月十三日は宗祖日蓮上人の忌日たよりて法会を儲る所なり」

【発音】ホーオンエ（無声）

ほうおんとう【報恩講】一名「仏語。祖師・先師の恩に報いるためにその忌日に行なわれる法要。真宗系では祖師親鸞の忌日に本願寺派・高田派各本山が、新暦で一月一日から一六日に、他派本山は旧暦で

ほうおうももん ホウワウ:【鳳凰文】〔名〕 鳳凰を文様化したもの。古来、瑞祥文として、装飾・絵画などに好んで用いられる。〔発音〕ホーオーモン 〔音〕 団

ほうおうりゅう ホウワウリヤウ【法王蓮】〔名〕 ローマ教皇法王を元首とする世界最小の国バチカンの領地。〔発音〕ホーオーリョー 〔音〕 傘・団

ほうおうちろう ホウワウ:【鳳凰楼】中国、秦の穆(ぼく)

び住まいの風情をこの曲趣の象徴と考え、茅屋の字をあてた。・音曲声出口伝「音曲に祝言・ばうをくの声の分目をしる事。略ばうをくの声と云は、声を鉢にして機をゆるくもつ。是やはおくに弱きなれなり」・榊原雅談「上・幽玄より出るははおくに体かねば」・ほうおおくひ（榊杆）「名」・「ほうおおくみ榊杆」に同じ。・雑俳・玉の光「二十分じや・とも袖口に捧おおくひ」

率土之濱已落仁恕、而普天之下未浴法恩。＊運歩色葉「法恩はふラン」（発音）ホーオン　儼々①
 ほうおん「報恩」②恩に報いること。恩がえし。
 ＊廬山寺文書・天祿三年五月三日・天台座主良源進告
 （平安遺文二・三〇五）「遺弟知之、若有報恩之志者、必可修講說論義、不可行他善」。＊昔一四・一二「然れば現身に四人の父母を敬て、遂に孝養・報恩しけり」。

一月二日から二八日まで行ない、末寺ではまた別に一日ないし数日、これを行なう。新義真言宗系では祖師寛覺の忌日に、真言宗智山派が二月一日に、派によつては夏冬二度行なうが、天台宗でも祖師の忌日に別して九月一七、一八日に行なう。お誂。

《季冬》・源平盛衰記三三・福原管絃講事 法住寺殿にて、報恩講（ホウワンカウ）経供養の時、園城寺伝

公の娘弄玉(ろうぎょく)が笛の名手、蕭史(しょうし)に嫁して住んだとされる伝説上の高殿の名。二人が蕭(しょう)を合奏すると鳳凰が舞い降りてきたが、ついに二人とも仙人となって昇天したという。鳳凰山。〔発音〕ホーオーロー。〔語源〕ほう・おうく。①蓬(蓬屋「名」)②蓬(よもぎ)で屋根をふいた家。草ぶきの家。＊玉葉・安元三年三月二七日

ほう・おくり〔名〕 漢人形などを形代(かたしろ)とし
 ほう・おおくみ〔名〕 和服のおおくみ幅の上も裾も
 同じ半幅にして袴のように短冊型になっているおく
 み。ほう・おくび〔名〕 袴の裁ち方
 ほう・おおくみだ〔名〕 和服の裁ち方の一つ。
 おおくみを袴のように長方形に裁つこと。袴裁ち。
 袴〔名〕 漢人形などを形代(かたしろ)とし

・後漢書 呉良伝「報恩之義、莫大薦士」 ② 仏・祖師・親などの恩に報いるために、法事・布施・礼拝などをす。③ 霊異記 下・二五「七ヶ日を遂て 斎食をせし、報恩すること」 宝物集「おやのために忌日を報恩せぬ物や侍されば」 染布ホーロン ④ 余之 ⑤ 百録 包色 文明 伊京 明夫 天正 鐘頭 黒本 易林 書言

ほう・おん ハウワン【飽満】《名》 あきるまで飲食し、あ

記・七八、報恩講講鑑事。長守權僧正号龍華院、略々於院内、報恩講被始行之。衆徒感之。・東都歳事記・一月二日、向宗寺院報恩講、廿八日まで修行、八開祖親鸞上人の忌日によつて法会を設くる所なり、世俗おかうといひ、又おしと月といふ。〔発音〕ホーオンコウ、ホーンコ（飛驒、愛知）〔鑑〕①
ほうおんこういんじょうえ：インジャウエ〔報恩講引上〕

「女院渡御蓬屋」・源平盛衰記八・讃岐院事「早く
民煙蓬屋（ホウヤク）の悲涙を止て、必ず三仏菩提の
妙位に昇らん」・謝靈運過白岸亭詩「弘衣遶沙坦、
緩步入蓬屋」②転じて、みずばらし家。自分の
の家をへりくだっているものにも用いる。・中右記「承
徳元年正月二日、戊戌時許蓬屋之北隣一許町小屋等
焼亡」〔発音〕ホー・オク 蓬屋② 〔註〕園色葉文明

て、病氣や災厄の原因になる霊的なものを村外に鎮
送する行事。〔開直ボー・オクリ 繪之団〕

ほうおし〔棒押〕《名》二人で棒の両端を持って押し
合い、力くらべをすること。また、その遊び。●滑稽
本・七偏人・三下棒押をすりやア、棒を捻り切て仕舞
のだ。〔開直ボー・オシ 繪之団 會之団〕

ほうおどり：をど〔棒踊〕《名》棒を使ってする踊り。

たかく衣服を着ること。何の不足もなく生活すること。●飽食暖衣。＊俳諧 鴉衣・前・下・三八・乞食画賛「つねに飽温の恩沢を省みて」〔開道ホーオン 繪之〕
ほうおん【原音】《名》①〔黃帝の楽師の伶倫が、崑崙山の下で鳳凰の声をきいて笙（しやう）の楽律を定めたとされることから〕鳳凰の鳴き声。転じて、笙や笛など音色の範とされる。＊本朝文粹三・神仙仙都

【名】浄土真宗の末寺や門徒の家で、陰暦一〇月二八日の、親鸞上人の忌日に行なう報恩講。御取越（おとりこし）。【季・秋冬】

ほうおんさい。パウオン：【防音材】【名】音を吸収する性質のある建材。多く、コルク、ガラス繊維、フェルトなどが用いられる。【発音】ポー・オンザイ。【會・同】

ほうおんしや。【報恩社】明治三年（一八七〇）各府県

ほうおく：ヲク【豊屋】名 大きな家。立派な家。＊本朝文粹一・二・池亭記「慶滋保胤、世人好起豊屋峻宇、殆至三山節藻、宮・正法眼蔵、行持上、いはんや此の日本国は王臣の宮祿、なほその豊屋あらず」＊列子楊朱「豊屋美器、厚味姦色」＊
ほうおく：パウウタ【房屋】名 家。家屋。＊三教指帰下「青藤張天、不勞房屋」＊俳諧・世説一三北枝家焼失

●落本・通気粹語伝三「久紋龍さんがぼうおとりをしなんと」
 ●発音ボー・オドリ
 ●「ほう」の「連語」富山①事業などに失敗する。
 ほうおになる。くじける。富山県礪波437 三重県鳥羽603
 滋賀県622 京都府626 大阪638 兵庫県659 奈良県660 出雲
 716 徳島県805（ほうおらかす）飛騨539（ほうおらかす）
 愛知県中島郡584（ほうがおれる）奈良県吉野郡大淀

良香「玉女吹簫」學鳳音於麗譙之上」・新論・崇學
「海蚌未剖則明珠不顯 崑竹未斷則鳳音不彰」
② むはういん (鳳音)
ほうおん バウん 〔鳳音〕① 騒音を防止すること。
騒音が生活の場にはいることを防ぐこと。② 騒々
しい音をたてないようにすること。また、発生した
音が外部に広がることを防止すること。
〔発音〕ホー

に設けられた社会救済の機関。有志の寄付した米や金を管理して、不慮の災害に備へ、自立不能のものに貸与した。〔開箇ホーオンシヤ 〔備之〕団 ほうおんにやりこう 〔報恩舎利講〕名〕 仏語、報恩供養のためにやる舎利講。吾妻鏡、寛元三年（一〇月）三日「入道大納言家於一遠、遠寿量院、被行報恩舎利講云」〔開箇ホーオンシヤリコ 備之〕

の説「元祿年中金城に池魚の憂有りて、房屋過半曠野となる」。紅樓夢「三回」等「過了殘冬、春天再給他們收拾房屋」(築園博・オク かなや 〇)
ぽうおく・パウック(茅屋)〔名〕 倉や・わらなどてふいた屋根、また、その家。●中右記「承徳元年正月二一日」火相分東西縱三丁迫来、心中祈念申太神宮、依爲遷宮行事也、而於茅屋北簷下火止了」。●十訓抄五・五日

670 ②絶望する。思ひあきらめる。和歌山市676
 ほう・おん・ハウ・[芳音]・[名] 地方の発音。方言にみら
 れる音。*范南 大唐宮詞「女冠烏爪解」方音一、識得蓬
 瀾路浅深」
 ほう・おん・ハウ・[芳音]・[名] 他人を敬って、その手紙
 をいう語。*万葉五八一二右詞文、跪承「芳音」嘉福
 交深」*謝朓 和伏武昌登孫擒故城詩「幸藉「芳音多」

オン(櫛之) 念之(念)
ほうーおん パウ：【忘恩】(五) 受けた恩を忘れること。
思知らず、曾我物語三・臣下ちやうしが事「かへり
きたる所の臣下、二度のほうおんをはして」、改訂増
補哲学字彙「Gratitude 忘恩」、儀礼疏士昏礼(婿
纏筭宵衣在其右)又家語有三不法、曾經三年喪
不去、休云、不忘恩也(寢直ホーオン(櫛之) 念之)

ほうおんじゅりん ホウワンジュリン〔法苑珠林〕中国唐代の仏教書。一〇〇巻。道世著。総章元年（六六八）成立。仏教の思想・義理などを内容的に分類し、豊富な引用によって項目別に概観したもの。一〇〇篇六六八部に分かれる。（**発願** 観一オンジ） **論一** 論一

ほうおんじょう ホウオンセウ〔報恩抄〕鎌倉時代の仏教書。二巻。日蓮著。建治二年（一二七六）成立。日蓮

蔵上人於冥途奉逢醍醐天皇事「一つの茅屋あり、帝こにおはします」・春秋左伝「桓公二年」是以清廟茅屋、大路越席」②みすばらしい家。あばらや。また、自宅をへりくだっている。・菅家文章「三路遇白頭翁」三間茅屋南山下、不農不商雲霧中」・太平記「三・

承^レ風采ニ余絢^ニ発苗^ニホーオン^ニ（鑑^ニ）
ほうおん ハク思^ニ「芳思」《名》人から受けた恩を敬って
いう語。御恩。＊明衡往来十中末「有^ニ年来之芳思^ニ」
＊玉葉養和二年正月一二日「余女房。自筆書^ニ写般若
心經^ニ。為^ニ答^ニ芳思^ニ也^ニ」＊太平記一九「越後守仲時已下

ほう・おん【冒蔭】《名》蔭子・蔭孫の資格を偽称して官職についたり、位階を受けたりすること。詐蔭（さおん）、偽蔭（ごいん）ともいう。仮蔭。●日本後紀「延暦一八年正月戊午、勅、冒蔭之徒、若能自首、宜從改正。」

道善男の死去の報を聞いて日蓮は本書を著わし、弟子の日向(こころ)を使者としてその墓前に献じさせたという。南無妙法蓮華経を唱え、広めることを原点とする出家者の報恩の道を明らかにしたものの。

〔桑田直一オンシヨウ 論〕